〈選外佳作〉要旨

体験的発想に立って北海道の自然を考える

三浦　二一郎

今春まで居住していた根室地方における活動体験を客観的にふり返りつつ、北海道の自然が抱えている諸問題に敷衍して考察を試みようとするものである。

一、「風蓮湖を守る会」の結成

これは根室地方に初めて誕生した市民団体であり、その後「根室自然保護協会」として脱皮した。一方、筆者は「根室自然保護教育研究会」の設立を提唱していたが昭和四十八年に正式に発会することができた。これらは根室地方にも各種の開発事業が進められつつあり、自然に対する危機感をいだき始めていた自然愛好者がよびかけに応じて結集したということでもある。

二、「風蓮湖国際カントリークラブ」建設反対

「風蓮湖を守る会」が結成直後に直面したのは湖畔槍昔地区に計画された標記ゴルフ場建設問題であった。守る会は直感的にゴルフ場建設は風蓮湖の環境破壊につながると受け止め、直ちに反対運動を展開することになった。結論的にはゴルフ場における殺虫剤使用について漁業者の同意を得られず、計画は見送りとなって終結した。この問題についての学術調査は、市民排除の形で一応行なわれたが、公開はなかった。今でこそアセスの公開は行なわれるようになったが、開発側の免罪符とならぬよう警戒を要する。

三、「西別岳高山植物盗採防止」パトロール

矮生のエゾムラサキツツジやエゾツツジは西別産としての好事家の蒐集欲をそそって高価で取引されるようで、つぼ型の盗採跡がすごい状態であった。営林署担当区と提携して毎日曜日にパトロールを実施したが、なかなか現場をおさえることはできなかった。しかし一定の防止効果はあったと思う。

四、「タンチョウ特別調査」への参加

昭和四九年タンチョウの特別調査員として風蓮湖の調査にあたった。その結果、釧路湿原とならぶ、重要な場所であることが明らかにされた。今後は、標識調査により行動実態を明らかにすることが期待される。

五、「知床横断道路工事」へのチェック

この道路によって動物の生息環境を分断することになったのは確かであり、知床半島の生態系を乱していることはまちがいない。

工事がズサンである事を知った我々は、調査会を持ち、工法の改善を当局に要望し成果をあげた。完成後も調査を行っているが、鳥相の変化、風倒木の発生が見られる。小動物への影響も考えられる。日高の道路は、知床の経験を充分学びとって行ってほしい。

六、「野付半島総合調査」

以前より本格的調査のなかったこの地区を、根室自然保護教育研究会の手により、昭和五二、三年の二年にわたり調査し成果をあげた。その結果は観光開発の歯止めとなり、従来の海蝕防止策に疑問をなげかけた。

七、「風蓮湖野鳥生息環境実態調査」

昭和五三、四年におこなわれたこの調査に、根室自然保護教育研究会が参加した。この種調査にアマチュアが勢力的に取組んだのは道内でも初めてであった。

当初はラムサール条約の候補地となっていた風蓮湖が、自治体の指定返上で見送りとなったが、学術調査の成果がいかされず遺憾である。

八、「風蓮湖を守る全道シンポジウム」等の開催

風蓮湖に係る開発はいろいろな形で出されてきた。それは、湾岸道路に対する布石としての計画でなされた。この道路は、経済産業に寄与するということであるが、知床横断道に見るように、通過型観光道路となることは明らかであり、地元へのメリットはうすい。このような問題を考えるため、シンポを開催した。

九、「日本野鳥の会根室支部」結成

これまでの活動により、地元のアマチュアの活動が活発になり、ウトナイ湖サンクチュアリオープンを機に、根室支部を発足させた。

十、「野鳥公園化構想による生態調査」

開発計画の消えぬ風蓮湖であったが、市当局より「野鳥公園化構想」が出された。これにともなう調査を、多数の野鳥の会メンバーとこれまで培った交流関係をもとに、道内の専門家の参加を多数得て行なわれた。。

この結果は市民に対して報告会が持たれ、市民に感銘をあたえるところとなった。特に地質班より、春国岱の地質が弱く道路建設はむずかしいとの報告は、市をあわてさせた。